第316号　日本海運倶楽部講演集

日本海運倶楽部 講演集

第316号

平成十二年十一月九日木曜日　日本海運倶楽部午餐会

中国、台湾と日本

東京外国語大学 学長
中嶋嶺雄 先生 談

太田事業委員長　それでは十一月の講演会を始めさせていただきます。本日は、東京外国語大学学長の中嶋嶺雄先生に「中国、台湾と日本」というテーマでお話をいただきます。中嶋先生は本日で四回目、前回は平成六年七月ということで、しばらく間があいておりますので、ご履歴を簡単に紹介させていただきます。

先生は昭和十一年、長野県松本市にお生まれになりまして、昭和三十五年に東京外国語大学中国語科をご卒業後、昭和四十年に東京大学の大学院国際関係論科を卒業されて、東京外国語大学にご奉職。昭和五十一年に教授に就任。平成七年に学長に就任されて今日に至っておられます。ご専門は国際関係論、現代中国学、アジア地域研究でございます。

また、「アジア・オープン・フォーラム」世話人代表、アジア太平洋大学交流機構（UMAP）事務総長、国立大学協会副会長等のご要職も兼務しておられます。「アジア・オープン・フォーラム」というのは、台湾前総統の李登輝さんが先生の著書を読まれて、こんなに中国のことを勉強されている人がいるのかということで、副総統時代に東京へ来られたときに面会を求められ、それを機会にできたもので、今年一旦終わられるそうですが、そのような経緯がございます。

著書はたくさんございますので、ここでは、この七月に光文社から出版されました李登輝さんとの共著『アジアの知略』だけを紹介させていただきます。この本、実は今日にそなえて昨日読みましたが、大変示唆に富んでいまして、皆様も本日の講演を聞かれて興味をもたれましたら、九百円ぐらいだったと思いますので、お求めいただけるとご参考になるかと思います。

それでは先生、よろしくお願いいたします。

―拍手―

皆さん、こんにちは。当海運倶楽部にはしばしばお招きいただきまして、大変光栄に存じております。本日は、私が専門とする中国、あるいは台湾などの問題を、ざっくばらんにお話させていただきたいと思います。

「アジア・オープン・フォーラム」

ただいまご紹介いただきました「アジア・オープン・フォーラム」についての説明からさせていただくのがいいかと思います。と申しますのは、このフォーラムは十月二十九日から十一月一日まで、松本で第十二回の会合を開きまして、無事終了しましたが、李登輝前総統がいろいろなところで、「来年はぜひ松本に行きたい」ということをおっしゃったものですから、マスメディアもかなり注目していました。

李登輝前総統とは、たまたま知遇を得まして、もう十数年来、家族ぐるみのお付き合いをさせていただいています。とにかく学識豊かで、リーダーとしては、あんなに素晴らしい方が果たして日本にいるだろうかと思うほど、かねがね敬服しております。

ともかく、李登輝さんの日本に対する知識の深さというのは、普通の外国人ではとてもあのようにはいかないと思います。台北近郊の農村生まれで、お父さんは警察官でした。当時の警察官というのは、地方の言わばボスです。そういうところに育

中嶋嶺雄　先生

ちました。しかし、そんなにお金があるわけではないので、旧制の台北高校に行きました。そこで勉強したときに一番影響された一人が新渡戸稲造だそうです。

彼は民政長官、東京を作った後藤新平に招かれるような形で行きまして、台湾の砂糖黍の品種改良をやりました。当初はやはり農民のあいだにも抵抗がありましたが、ハワイから新しい品種を導入して、本当に農村各地を回る。新渡戸さんは後に『武士道』その他、大変立派な啓蒙書を書きますが、私どもの東京外大とも非常に縁が深くて、明治六年に東京外国語学校ができたときに、英語科に新渡戸さんや岡倉天心、内村鑑三など、やがて日本を背負って立つ人たちが入りました。新渡戸さんの場合は、やがて札幌農学校でクラーク先生に教えを受けます。

やがて奥さんも外国人ということもあって、『武士道』のようなあれだけのものを英語で書いたのですが、その基礎は東京外国語学校でお雇い外国人から学んだ英語にあったと思います。そういう人ですから、新渡戸さんには李登輝さんも非常に敬服しています。

李登輝さんは、昭和十九年に京都帝国大学農学部農林経済学科に入ります。ただし、すぐに志願兵として、大阪で徴兵検査を受けて、自ら当時の日本の軍隊に入ります。高射砲隊を志願しました。

終戦そのものは名古屋で迎えたようですが、終戦直前の三月は習志野の高射砲隊にいて、当時の名前は岩里政男といいます。後にまさに政治の男になりますが、B29を一生懸命撃つけれども、高射砲はとても届かなかった。しかし、B24は射程がかなり違うので何機も撃ったと言います。そして、東京から千葉一帯が焼け野原のようになる光景も見ています。

そういう李登輝さんが言うには、とにかく台湾がいまあるのは日本のお陰だと。どんな田舎に行っても電気がきていた。水道があった。それでどんなに台湾の衛生状態や民度が上がったかわからない。そこへ持ってきて、小学校がどんな村にもあった。当時は公学校といいますが、そこへ日本からいい先生が来て教えてくれた。これが、李登輝さんの基本的な日本認識だと思います。

ですから、彼が非常に日本について親近感を持ち続けているというのは、まさに日本の教育というものがいかに大きな意味を持ったかということだと思います。そこに、日本の植民地統治というものの、台湾における一つの大きな意味があるということを、李登輝さんはいつも、何度も言っています。

ですから、逆に彼の目から見ますと、数年前に当時の村山首相がベトナムなどに行きまして、日本の戦時中の戦争犯罪を謝って歩いていた。李登輝さんは私に、「あの村山さんの姿はなんですか。いま日本に表明してほしいことは、二十一世紀における日本の役割であり、アジアにおけるリーダーシップだ。それなのに、五十年前の戦争のことを頭を下げて回って、どんな意味があるのか。嘆かわしい」ということを言っていました。それはやはり、李登輝さんの日本に対する思いでもあり、「日本よ、しっかりしてくれ」という感じだろうと思います。

このあいだ松本で開催し「アジア・オープン・フォーラム」に、李登輝さんがお見えになれなかった経緯は後でお話しますが、日本の経済界とも非常に繋がりが深い、辜一族の辜振甫さんもいままで団長でずっと来ておられましたが、ちょっとご高齢でもありまして、いまアメリカの病院に入院されています。

辜振甫さんは日本には東亜経済人会議の代表としても来ておりますし、それよりも何よりも、大陸中国との両岸会談の台湾側代表でした。辜家というのは台湾では大変なお金持ちで、そうそうたる人が出ていまして、日本では、その一族のリチャード・クーというエコノミストは、お馴染みだと思います。

いま、その辜振甫さんの甥の辜濂松さんが、また大変なやり手というか、ご活躍で、彼はいつも自家用機で外国を飛び回っていますが、今回は、その辜濂松さんが辜振甫さんの代理として団長を務められました。同時に、貴賓の郭婉容さんという女性もまた大変な方で、台湾では財政部長ですから大蔵大臣をやり、中央銀行の総裁、最近は政務委員、つまり国務大臣もやった人です。彼女もアジアの経済について非常に造詣が深いのです。彼女の専攻分野で神戸大学に専門の先生がいらっしゃったということで、神戸大学の戦後の学位の第一号です。ですから日本語も非常によくできます。

それらの台湾の人たちに松本に来ていただきました。私どもの「アジア・オープン・フォーラム」は全くの民間のフォーラムですし、日本の企業から協賛金を頂いて、すべてオープンにしてやっているフォーラムですから、民間が民間人を招くという形で対応しました。

しかし、李登輝さんが来たかったにもかかわらず、来られなかったわけで、非常に残念だということを、ご自身がビデオで会場に流しました。結局、これは煎じ詰めて言えば、作家の深田祐介さんが会場で言っていたことですが、「対中国恐怖症というものが、日本をここまでだめにした」と。

私は閉会の挨拶の中で、「これほどどこへでも行かれるようになった、まさにグローバル化の時代に、日本国が李登輝さんの海外旅行の自由を奪うということがあっていいのか。彼は、世界の中で誰よりも日本に親近感を持ち、日本に深い認識を持っている人である」ということをお話ししましたが、ご承知のように、これは外交問題であるということでした。

李登輝さんはこのあいだハベル大統領の招きでチェコに行きました。その前はイギリスに行きました。近くアメリカに行く予定になっています。これはブッシュさんが当選するかしないかによって、また随分変わると思いますが、クリントン政権でさえもそれは認めています。というのは、李登輝さんはコーネル大学で学位を取っています。「台湾における農工間の資本移動」というテーマの学位論文で、この論文は全米農業経済学会最優秀学位論文に輝きました。私もこの論文を拝見しましたが、これは李登輝さんが政治家であるということを抜きにしても、大変立派な学位論文です。

ですから、ご承知のように、総統現職のときにコーネル大学でスピーチをされました。アメリカのクリントン政権は、現職の李登輝さんをお呼びしているのです。中国はいろいろ言いましたが、結局それで済んでしまいました。今度、コーネル大学に李登輝記念館ができます。日本は台湾とこんなに近い。その台湾にこんなに親日的な人がいるにもかかわらず、アメリカとはものすごく落差がある。それは、日本は中国に近いから、日中関係はアメリカ以上に大事だといえば、そういう論理も成り立たないではないですが、とにかく日本は自由と民主主義の国ですから、一市民が日本に来ることを結果的には拒否するという国柄でいいのかどうか。そういう原点に立ち返って、私どもはいつも問題を考えてきました。

いま仮に台湾の現職の副総統が日本に来るとなったら、また日本中が大騒ぎせざるを得ない。ということは、この十五年間に台湾の存在が、あるいは、李登輝時代の十二年間はなおさらそうですが、ものすごく大きくなったということです。そうなればなるほど、大陸中国の側はそれに対して牽制する。あるいは、押さえ付ける。そういう構図ができてしまった。そして、日本は常に中国にお伺いを立てざるを得ないという構図ができてしまったのです。結局そこに、きょうのテーマの「日本、台湾、中国」という問題が色濃く出てきているという現実をお話せざる得ないわけです。

台湾が、この十二年間で李登輝時代の終焉を迎えたので、私どもはそれと共に「アジア・オープン・フォーラム」を締めくくりたいと。皆さんは、ぜひ続けてほしいとおっしゃるけれども、李登輝総統との出会いの中でできたフォーラムですから、明日発売の『文藝春秋』の巻頭随筆にもそのことを書きましたが、「アジア・オープン・フォーラム」はこれで責任を終えたということで締めくくりたいと思っています。

最近の台湾事情

この十二年間、台湾は本当によくやったと思います。まず、徹底した民主化をやりました。蔣介石、蔣経国の家父長体制で、あれほど独裁国家だった。これはまさに大陸中国と同じ中華王朝で、少しでもそれに背いたことを言えば牢屋に入れられた。そういう台湾をあそこまで民主化して、それこそ、このあいだの総統選挙では、現状維持か、大陸との統一か、あるいは独立かで、争点をものすごくはっきりさせて大々的な選挙をやったわけです。

私も夕べはアメリカ大統領選を見ていましたが、ああいう形で直接選挙をやって、ある意味では社会の活性化、あるいは透明感ということで、すごくいいのではないかと。それがやはり、アメリカを支える大きなバイタリティーになりますよね。今回どういう結果が出るにしても。

台湾の場合は、もっとダイレクトで、まさに直接選挙です。そういう選挙のやり方が、いま一時的に、原発問題などで少し内政が混乱していますが、やはり台湾の人たちにある種の自信を与えた。そこまで持っていったのは大変なことだと思います。

李登輝さんは見事にそれをやり遂げた。そのプロセスは、一九八八年一月、蔣経国さんが亡くなって副総統から総統になりました。そして八九年に、私どもの第一回の「アジア・オープン・フォーラム」が台湾でありまして、その直前が例の天安門事件です。中国は、台湾が民主化の方向に行こうとしているときに、一方で天安門事件が起きた。このコントラストがものすごく大きい。

そして、台湾の場合は、九〇年、九一年ぐらいまでは、まだ李登輝さんも本当に包囲されていました。古色蒼然とした国民党のお歴々がずっといまして、たまたま副総統から総統にはなったものの、誰も李登輝さんがあそこまでやるとは思っていなかったし、「すぐ潰されるのではないか」「所詮、学者ではないか」というように周りの人たちは思っていたわけです。そういう状況の中で、李登輝さんは一歩一歩それを打ち砕いていきました。その手法は、先ほど紹介いただきました李登輝さんと私の共著の『アジアの知略』という、カッパブックスから出ている本に書いてありますが、いろいろな問題を乗り越えてとにかく民主化をやって、そして、最終段階は、ご承知のように、自分が推した国民党の連戦さんが敗北します。そして、民主進歩党、つまり野党であり、そもそも党の綱領には独立を掲げている民進党の陳水扁さんが総統になりました。

李登輝さんは、結果的にはそれでいいと思っています。もしも、あのときに宋楚瑜さんが当選していたら、再び台湾は外来政権のものになった。というのは、ここが台湾問題の一つの鍵なのです。やはり、李登輝さん自身も含めて、いわゆる台湾の本省人の人たちは、いかに外来政権、外省人に痛めつけられてきたかという問題意識があるわけです。そこを李登輝さんが、台湾のアイデンティティーを固めながら、いままで痛めつけられて国に帰国もできなかった人たちを、みんな帰国できるようにしたのです。日本のテレビで最近活躍している金美齢さんなどは、このあいだご主人が四十年ぶりで帰国しましたが、彼女を含めて台湾に帰れなかったのをあそこまで持っていったわけです。

そういうときに、日本の場合は、政治改革というと法律や組織、あるいは選挙制度を変えることになりますが、台湾の場合は丸ごと体質を変えなければいけなかったのです。これがいかに大変なことであったか。

いま、大陸中国のほうは、毛沢東、鄧小平、江沢民も含めて、結局は王朝政治、中華思想が変わっていないと思います。台湾の場合、そこを変えました。それが、また再び外来政権のところへ戻ったら大変だと。宋楚瑜さんという人は私もお会いしたことがありますが、わかりやすく言えば田中角栄型の政治家で、外省人です。台湾省主席をやり、国民党の秘書長つまり幹事長を長くやっていました。これは非常に利権が集まるところです。

ですから、今回も見ていて、もう少し宋楚瑜さんが票をとっていたら、李登輝時代の十二年間が元に戻ったかもしれないと思いました。李登輝さんは「これでよかった。今回の選挙は危なかった」と言うのです。ということは、野党の陳水扁さんであっても、むしろ外来政権、つまり外省人に再び持っていかれるよりも遥かに満足だというのが、彼の基本的な考え方です。しかも、国民党の主席としては、副総統の連戦氏を立てて、全面的に自分の選挙以上に頑張ったわけです。にもかかわらず、結果が思うようにならなかった。あるいは、思うようになったと言ってもいいのでしょう。それで満足されている。

そして彼は、三月、まだ国民党主席としては任期を一年以上残してい

るにもかかわらず、辞任しました。一つには、連戦さんが選挙の最終段階で李登輝さんにも背き、台湾の選挙民に対しても冷や水を浴びせかけるようなことをしたのです。それは、先ほどの蔣介石夫人の宋美齢女史の手紙を取りつけて、「宋美齢さんも私を支持している」ということを選挙戦の最終段階でやったわけです。ですから、この連戦さんの認識も非常に過っていると思うのです。いま蔣家一族の古証文を持ち出すことによって、台湾の選挙民がどういう反応をするか。逆効果でしかないことをおやりになった。それは同時に、李登輝さんがあれほどいろいろ考えてやってきたことに対する謀反のような形にもなったわけです。李登輝さんは、三月二十四日に国民党の中央常任委員会があるというときに、たまたま私といろいろ話をして、総統ご自身は、こういう問題を誰にも話せないわけです。私自身は、そういう形でときどき相談も受けましたが、彼はその日に「国民党の主席も辞める。今度は一市民だから、松本にも行くからね」と言って電話を切りました。

そういう一市民になっても、結局、日本というか外務省が、それを実現できなかったというのは非常に残念だと思うのですが、今後は、李登輝さん自身、日本に来る機会が必ず、このことによって私は逆に出てきたというように思っています。彼は日本に来ても、大騒ぎして迎えられるのではなく、静かに日本に来たいと言っていますので、本当はそれが実現して、なんでもなく普通の市民が交流できるといいのですが、ただ、彼自身はかなりの影響力を持っていますからね。皆さんも李登輝さんにお会になった方がいらっしゃるかもしれません。そうすると、みんな彼のファンになってしまうのです。そういう魅力的なキャラクターだということが一つあると思います。

もう一つ、台湾についてお話しますと、やはり台湾が高信頼社会であるということです。ということは、一つは民主化という問題もありますし、台湾人としてのアイデンティティーが非常に強くなってきていますから、自分たちは中国人ではないという意識をみんなが持ってきています。二十年～三十年前にアンケートをすると、必ず「自分たちは中国人だ」と言っていましたが、いまは「自分たちは台湾人です」と大部分の人は言います。それは、ある意味では、どんなことをしてもやむを得ない現実なのです。

台湾は、いまや一人当たりＧＮＰが一万五〇〇〇ドルですから、もう十分先進国入りしています。大陸中国は随分と経済成長したけれども、一人当たりＧＮＰではようやく八〇〇ドルです。大陸は十三億人の人口を持っていますから、全体としてはものすごく大きいけれども、問題は一人当たりＧＮＰがどれだけ豊かになって、どれだけ市民社会的な生活ができるかということでは、雲泥の差があるわけです。

ここまで来ますと、ある意味では非常に自信をつけてきている。そういう状況の中で、対外発信力は日本以上ではないかというのは少し誇張し過ぎかもしれませんが、例えば、ノーベル受賞者も、今回は白川さんが受賞して日本は増えましたが、アメリカ系台湾人を含めますと、このあいだまでは台湾のほうが多かったのです。中央研究院、アカデミア・シニカという国の研究所の院長、李遠哲さんも、ノーベル化学賞を遥か前に貰っています。そういう点ではなかなかしっかりしています。

台湾の国立大学にしても、国立政治大学、あるいは国立台湾大学等々、非常にしっかりしてきています。東南アジアの中では、日本以外では、台湾の大学を抜きにしてアジアの大学を語れないほど充実しています。中央研究院などは、日本から大学院生が行きますと、その日から部屋に入れるようになっていて、図書館などの施設もすぐに使える。その部屋には冷蔵庫やパソコンがちゃんと備えられています。

日本の大学は、私どもの東京外大も今度新しいキャンパスをつくりましたので、ぜひ皆さんにも見ていただきたい。従来の国立大学のイメージを一新するようなキャンパスだと自負していますが、なかなか一般的には、国立大学というとなんとなく汚くて、老朽化していて、公共事業をそういう方面にやっていただくといいと思うのですが、本当に恥ずかしいですよ。外国の研究者が来ても住むところもない。台湾の大学は、そういうところも非常によく備わっています。

そういう現実があるにもかかわらず、これまで国立大学は、台湾の大学とは学術交流をしてはならないと言われていました。私が学長になってから、まず事務局を説得して、次に文部省の次官、外務省の次官まで話を持っていって、国立大学としては最初に交流協定を結びました。台湾国立政治大学と結び、昨年は国立台湾大学と結びました。五十数項目

にわたって、いろいろなことを全部クリアしました。例えば、これまでは、日本と台湾の学者が科学研究費という日本の文部省のお金を使って、例えば海洋調査をやるということもできなかったのですが、それもできるようになりました。

このあいだ、国立政治大学の七十周年記念に、私は学長として招待されてスピーチをしました。これは公務ですから、公用旅券を発行してもらって行きました。ですから、民間レベルでも、あるいは国でも、やろうと思えばかなりのことができます。

もう一つは、東京外語大は一五％近い留学生を持っていて、国立大学で一番比率が高いのですが、大陸からの学生が一番多くて、次が韓国、次が台湾です。いま四十人近く台湾からの留学生を受け入れています。みんな非常に優秀です。しかし、他の国の留学生は、交流協定を結んだ枠内で来ますと授業料が相互免除になるシステムがあるのに、台湾の場合は難しいというのです。なぜなら、授業料というのは国庫金ですから、国に入るわけです。「国」というものが出てくると、台湾を国として考えては困るということで、これもまた大変でしたが、最後は大蔵省を説得して、大学には国や民族といった格差があってはいけないということから、台湾の国立大学とのあいだの授業料相互免除もできるようになりました。ですから、やろうと思えば一つ一つできるのです。

そういう状況の中で、先ほど言いましたように、民主化という大きな座標軸を横軸とすると、台湾の人は非常に自信を持ってきています。発信力においてもすごいし、自分たちは台湾人だと。あれほど大陸中国に押さえつけられ、国連からも排除され、国際社会で孤立していながら、よくやっていると思うのです。そのことが日本国民にも非常に理解されているので、今回の李登輝来日についても、多くの人たちが「ぜひ実現するように」と、心から言ってくれている人も多いし、何よりも、去年九月の台湾大地震のときの義援金の集まり方というのはすごかったのです。これは、日本国民の中にも、いまの台湾というのは公的には全く関係がないにもかかわらず、非常に切っても切れない絆があるのだということの証明ではないかと思います。

今回のアジア経済危機に関しても、台湾は一番下がったときで三・九％に成長率が下がりましたが、もう既に今年も六・一％ぐらいの成長になるでしょう。しかも、去年の台湾大地震によって影響を受けたことは、ほとんど全部吸収してしまって、経済成長の面ではほとんど回復してしまったということも大きな要素だと思います。

台湾の場合、非常にフレキシブルに通貨調整も行ってきましたから、ある意味では積極的に市場原理というものを取り入れて、市場に敏感に、しかもフレキシブルに反応してきました。特に台湾がアジア通貨危機の中でも例外であり得たのは、非常に柔軟なシステムだったからで、それも見事だったと思います。

香港返還直後に起きたアジア通貨危機では、タイ、マレーシア、シンガポール、韓国など、みんな海外からの短期資金にアタックされて、ガタガタと崩れていったわけです。香港などは、まだその影響から回復できていないと思います。ですから、大陸に返還されれば香港はますます繁栄すると言われましたが、いまの香港はどうでしょうか。経済的に非常に厳しくなってしまいました。日本企業も香港からどんどん引き揚げざるを得ない状況です。デパートを見るとわかります。香港と言うと誰でも大丸を思い出すぐらい、あれはまさに日本の経済成長、ある意味ではエコノミック・アニマルと言われた時代の最も先端的なショーウィンドウだったと思います。その香港大丸も、もう跡形もありません。

ところが、台湾に行きますと、ここにそごうの関係者がいると恐縮ですが、そごうでさえも大成功なのです。台湾そごうはものすごく成功しています。あるいは、三越も台湾では大成功です。日本でいろいろ問題があるとされるデパートが、台湾ではみんな成功しているというのは、先ほど言ったように、台湾での日本に対する信頼感というものが非常に大きいのです。

ですから、香港も、デパートはわりあい商業資本で足が速いせいか、一時は軒並日本のデパートが出ていましたが、高島屋、三越、松坂屋、伊勢丹と、みんな撤退してしまいました。肝心の大丸もなくなった。そういう意味からすると、私に『香港移りゆく都市国家』という本がありまして、当時は日本郵船とか、商船三井のもとになる会社とか、すでに明治期にいろいろ交流がありました。そういう海運界としてもいろいろな関係があったわけですが、どうも私が見る限り、香港は結局中国の支配下になってしまった。そのために、香港の経済は、あんな自由放任の経済が統制経済になってしまった。

私は『沈みゆく香港』という本も書きましたが、ここに香港が沈んでいく一番の原因があると思います。

香港の場合、「一国両制」という制度ですが、一つの国に二つの制度というのは無理であるということを目の前で示されたわけですから、台湾の人たちはますます大陸から遠く離れていきます。「一国両制」というのは、言わば戦略、戦術、もっと言葉をきつくすれば、まやかしであるという気持ちが、目の前で香港の現実を見ていればわかります。

一昨日の新聞で報じていましたが、ウィリー・ラム君という、なかなか優秀なチャイナ・ウォッチャーで、「サウス・チャイナ・モーニング・ポスト」という香港の代表的な英字新聞の中国関係の主筆ですが、彼の非常にいい本があって、丸善から私も翻訳を出していますが、そのラム君が今回「アジア・オープン・フォーラム」にも来ていまして、帰ったらクビになったと。最終的には自ら辞表を提出したのですが、彼は中国関係の主筆から下ろされたのです。彼は非常に優秀で、特に「サウス・チャイナ・モーニング・ポスト」のような影響力のあるメディアは彼の記事でもっていたので、彼がいなくなったらメディアとしての力はなくなるのではないかと思っているのですが、この新聞は、言わば大陸系の人に買い取られて、オーナーは大陸系ですから、少しでも大陸の批判をすると、これまでもいろいろクレームをつけていました。それがもう書けなくなってしまったわけです。

香港のよさというのは、つまり、玉石混淆かもしれませんが、香港情報といって、大陸に関する情報がたくさんあったわけです。それもなくなってしまう。香港にもう一つ、日本経済新聞に似た「信報」という新聞がありますが、ここなどは、少しでも中国に対して批判的だと中国系企業が株式市場に上場した公の公報さえも出してくれない。つまり、言論の自由がなくなってしまったわけです。もちろん、PRの広告についてもいろいろ圧力をかけてきますから、メディアがこのようでは経済が繁栄するはずはありません。そのことは、実は大陸中国としても決していいことではないという認識を、大陸の人たちが本当に持っていたら、いまの大陸は変わると思いますが、そこはやはり、頑として譲らないのです。

ですから、今回、朱鎔基さんが来日して、言わば彼なりのパーソナリティーが出たことはよかったと思いますが、にもかかわらず、肝心なところは少しも変わっていなかったと思います。ましてや、朱鎔基さんも、江沢民さんが一方にいますから、そこも変われないということになりますと、中国は今後しばらくはいまの体制を維持していかざるを得ない。私は、やがて中国も変わると思うのですが、その時期はいったいいつなのかということが大問題だと思います。

最近の大陸中国

そこで、今度は最近の大陸中国のほうに入っていきたいと思いますが、私は海運界のことはよくわからないのですが、どうもビジネスの上ではあまり期待できないのではないかと思います。

というのは、最近こういうことがありました。二つ三つ例を出しますと、まず、日本の経済界にとってショックだと思われたのは、一つはヤオハンの倒産がありました。このあいだ和田一夫さんが日経新聞に懺悔録みたいな回想録を書いていました。和田さんご自身は、私はある意味では非常に純真な方だと思いますが、結局、中国側は本体がだめになっても何ら救済しないどころか、骨の髄まで吸われて「はい、さようなら」ですよね。では、あんなに得意満面に和田さんが香港に拠点を移し、香港上海銀行の会長が住んでいたミッドレベルの大邸宅を買われて、その頃日本のマスコミにもはやされて、今度は大陸だというので、全部大陸に資本投下された。

浦東開発区に、ネクストエイジ21というアジア最大のマーケットをつくられたのですが、結局そこもうまくいきませんでした。うまくいかなかった理由はいろいろあると思います。中国の人たちが来るには遠過ぎて不便であった。見には来るけれども、中国人は買わない。よほどブティックか何か高級品を売って上海のニューリッチを対象にすればよかったけれども、それにしては店が大き過ぎて、一般庶民を対象にした。そのためにブランド製品を置いていない。庶民を対象にするなら、同じものがいくらでも上海市内のデパートで売っているわけです。

私もいろいろ視察しまして、アサヒの缶ビールをビニールの袋に一本入れて買うと十一元です。十一元は高いですよ、中国人のいまの標準からすると。珍しいから一本買ってみんなで回し飲みはするかもしれません。しかし、日常的にビールを買う

なら、いくらでも安い青島ビールがあるわけです。そのほかの地場のビールもたくさん売っています。それやこれやで経営がだんだんうまくいかなくなると、中国側はご承知のように合弁比率を変えてくるわけです。遂にだんだん乗っ取られてしまって、投下した資本はゼロになってしまう。そのために、本体がだめになっても、では救済するかというと、全く救済しない。ですから、これは一つのいいレッスンだと思います。

それから最近では、GITICの倒産。広東省の国際信託投資公司で、できたときは大変な鳴り物入りで、これからは広東の時代だ、香港の時代だ、華南経済圏だと言ってできました。これが倒産しました。日本の銀行は、特に香港辺りから随分投資しているはずです。一〇億ドル以上だと思いますが、国内でもいろいろ金融関係が問題になっているだけで、その数字はあまりはっきりさせないようですが、大変な痛手を受けました。これも、亡き小渕さんが大陸を訪問したときに、そのことも少し触れましたが、日本側が十分な調査をしないから悪いのだと言わんばかりの、冷たい返事ですよね。さんざん日本の資本を誘致しておきながら、そうです。

今度は、北のほうの大連はどうかと言いますと、大連の技術開発区は、日本の合弁企業が一〇〇％出資しているところはたくさんあります。そこの、言わば大連の発展とリンクした形で立ち上げた、大連国際信託投資公司（DITIC）も倒産しました。これもなんの挨拶もありません。

これらのことをいろいろ考えてみる必要があると思います。このあいだ朱鎔基さんが来て大西部開発、中国奥地の開発と言うけれども、そう簡単に奥地にいま資本を投下する日本企業というのは、よほど慈善事業でもやるつもりならともかく、そう簡単には出てこないのではないかと思います。あまりにもこの間のレッスン料が高かったと思います。

新幹線も、リニアモーターに乗ってみたとかいろいろ言われていますが、ここがやはり台湾と違うところです。台湾の場合は、本当に先ほどの辜振甫さんも、李登輝さんも、なんとかして日本の新幹線を導入したいと。しかし、自由な経済システムになっていますから、一応入札ですよね。本当にそのために身を砕いて、しかも「日本の新幹線がいい」と言ってくれた。辜振甫さんなどはあの老齢を押して、しょっちゅう日本に来ているのに、わざわざ博多から東京まで新幹線を試乗しているわけです。それなのに、日本の運輸省は課長も出てこなければ、通産省も何か係官が出てきたぐらいでした。穏やかな人ですから、そうは色を出していませんが、私はそれを見て本当に恥ずかしいと思いました。アメリカの場合は堂々と閣僚が出てきます。現職の局長が台湾に行きますよ。

そこまでされても、言わばそんなに日本に欺かれながらも、やはり日本の新幹線を導入したいというのが台湾の人たちです。恐らく中国は、お互いに欧米と日本の両方に気を持たせておきながら、最後は欧米にいくかもしれませんし、なかなかそう簡単ではないような気がします。それは潜在的に、一つには中国の人たちのある種の反日構造。朱鎔基さんはあんなことを言いましたが、最近の中国のメディアや教科書の日本批判はすごいですよね。とにかく日本は軍国主義で、日米安保もけしからんし、日本は再び軍国主義で右翼勢力がどんどん台頭しているということを教え込んでいますから。

中国の留学生を我が家にもホームステイさせたりしていますが、留学して本当に日本のことを理解してくれる人たちは、日本はそんな国ではないということをみんなわかってくれていますが、残念ながら、そういう留学生は卒業しても中国へ帰りません。私のゼミも何人も中国の留学生をお世話していますが、理系はだいぶ中国に帰るようですが、文系の人は帰らないですね。それなりに就職もできますから。

そういうようなことで、中国の場合はなかなか難しいのではないかというのが、私の率直な感じです。やはり共産党の独裁国家だということを考えざるを得ないのです。ところが日本人は、いまの中国は日中友好とか一衣帯水とか、同文同種と言われるものだから、つい本質を忘れているのではないかと思います。台湾の場合は自由と民主主義です。日本も同じ主義をとる以上、やはり中国は共産党の独裁国家だということを忘れてはいけません。共産主義者というのは、資本家から収奪することを最大の目標にしますから、いくらヤオハンさんが人がよくても、所詮はやはり商業資本家であっても資本家ですから、資本家から取りあげても決してそのことを彼らは悪いと思わないのです。日本人はそこを忘れてはいけないと思います。中国というと常識のレンズが曇ってしまって、こんな単純なことを忘れてしまうところに、日本人の対中国認識の根本

的な弱点があるし、その弱点を十分承知した上で中国は日本との関係をつくっているのです。ですから、日本がいくらODAで援助しても、そんなものは向こうは有り難いとも思わない。賠償さえ取らなかったから、あるいは、戦争責任だから当然だというような考えなのです。北京空港をあんなに立派につくってあげても、このあいだまでは、まあ、クレームをつけたからようやく目立たないように表示するようになりましたが、結局、日本からの援助ですよね。本来、軍事力を増強したりしているところにはODAをしてはいけないという原則があるにもかかわらず、日本政府はそれに目を瞑っているところに問題があります。ようやくそのことにいろいろ議論も出てきました。

翻って考えてみますと、中国はそうやって日本を批判する反面、このところずっと軍事力を増強しています。国防予算だけで、去年も一五%増強しています。天安門事件以来、十一年間にわたって二ケタの国防費の増強が続いています。一番多いときには対前年比二二・五%増です。日本が防衛費を例えば一%増大したら、大騒ぎですよ。しかも、中国がいわゆるミサイル取引をしたり、ロシアから航空母艦を買おうとしたり、北朝鮮の核開発を手伝ったり、イスラム原理主義の国にミサイルを提供したり、パキスタンにミサイルを売り込んだり……。そのもとになる費用は、いわゆる国家予算の中で公になっている国防費には入っていません。国防費というのは、言ってみれば人民解放軍の制服や、日常的な兵站の補給には使うわけです。

そうすると、国際的に見ても信頼すべき専門家のあいだでは、だいたい国防費の四・五倍、多い推計では十一倍ぐらい、中国の軍事費というのはあるといわれています。ですから私は、国防費と軍事費というのは分けて考えています。それほど、いま中国は軍事力を増大させているのですが、そのことには日本は何も言っていません。このあいだまでは、日本の水域までどんどん「調査船」と称する船が入ってきています。これもとぼけた話で、出先がやったことで自分たちトップは知らなかったということですが、こんなことで「はい、そうですか」と言うような日本政府では困ります。中国という国は独裁国家ですから、こんな大事な問題を上が知らないで下が勝手にやるようなことは、絶対にあり得ません。公安関係、軍事関係はものすごい国ですよ。

例えば、日本の場合、最近ちょっと減っていますが、中国からの不法難民がだいぶ入ってきています。ご承知のように、既に日本には、不法入国の外国人はたくさん入っていますが、とくに中国から大量に入ってきています。この問題について、現場でタッチしたお巡りさんや警察庁のトップの人と話す機会がありました。その警察官が言うには、新宿の歌舞伎町などは別として、池袋などに行くとたくさんの中国人が働いているが、一度尋問して不法滞在ということがわかると、その一人に三ヵ月ぐらい関わってほかの仕事ができないぐらい、調書を作ったりいろいろなことをする。まず身元確認が必要だそうですが、福建省の農村に確認してもすぐには返事が来ないそうで、場合によっては出向かなくてはいけなくて、その費用がすごくかかる。そして、仮にそういう手続きを終了して送り返しても、すぐまたリピーターで戻ってきてしまうそうです。ですから、見て見ぬフリをするのが現実だと。

日本社会は明らかに、まあ、中国だけではないかもしれませんが、不法な外人によって日本社会のコミュニティーは完全に侵食されているわけです。日本の場合、警察庁にしても公安調査庁にしても人手が限られていますし、そんなことをやっている暇がないから、入ってくるほうはすごい。これについては、昨年、草思社から『ある中国人密航者の犯罪』という本が出ていまして、著者も訳者もペンネームですが、それを読んでみますと、いま私がお話したようなことが、実に微に入り細を穿っていて、私もショックを受けました。例えば彼らは、パチンコの裏ROMというそうですが、どこの店の機械が不正にたくさん玉が出るかということを見つけると、そのことばかりに集中して集団で知恵を絞る。パスポートの偽造などは本当に朝飯前なのです。そのためだけに朝から晩まで、会合したり情報収集したりしているわけです。しかも、蛇頭というマフィアが絡んだりする状況の中で、日本は恐るべき寛大な社会だなと思います。

しかし逆に、仮に皆さんが中国人に成り済まして北京に一週間住めますか。その日のうちに焙り出されますよ。いくら日本人で、私が中国語をしゃべれるからといっても、中国社会というのは報告（密告）制度があって、全部統制されている独裁国家ですから、一日、二日たりとも中国社会の中に紛れ込むなどというこ

とはできない。ところが、日本というのは寛大な社会なのか、私は警察庁のトップに会って「だいたい捕まっているのですね」と聞いたら、「いや、捕まっているのは一割で、あとの九割は日本に入っている」と言うのです。それを聞いて愕然としましたね。そういう人たちの一部が、就労ビザを持ったような顔をして働いていると思います。

留学生はこのところかなり緩和されまして、私もそのために努力しましたが、週四日間ぐらいは、一日五時間までアルバイトをしてもいいことになりましたから、留学生は就学ビザを持っています。たまたま私は文部省の留学生政策を担当していて、法務省の入管の人と一緒に会議に出たときに聞いたのですが、各大学が留学生を、例えば十人受け入れると、そのうち大学の申請のとおり入国管理局が許可できるのは五分の二ぐらいだと言っていました。あとの五分の三、大部分は撥ねられるそうで、大学はそこまでチェックできません。履歴書とか経歴の詐称などもお手のものだということで、東京外語大はきちんと試験をしますが、他の大学で留学生をどんどん増やさないと定員が確保できないといって、甘い審査で受け入れようとすると入管で撥ねられる人たちが多いようです。

いま私がお話したような現実は、現在の中国社会がいかに病んでいるかということです。ちょっと日本が緩めたら、あれほど取り締まっていてもワーッと来ます。いまは台湾が困っています。福建省から来た場合は見分けがつかないと。日本や台湾から大陸に逃げていく人はいませんよ。そこにいま、中国と日本、台湾の間に大きな問題があるのです。

そしてもう一度、先ほどの軍国主義云々の話に戻りますと、いま中国を攻めようとする国があるでしょうか。ないですよね。ソ連との関係もロシアになって、いまはむしろ友好的です。それなのに、なぜ毎年のように軍事力を増強するのか。この単純な原点に戻って中国を見てください。一つには国内的な締めつけです。天安門事件以来、どんなことがあっても警察力と軍事力、まさに「政権は銃口から生まれる」という毛沢東の教えどおり、これを徹底的にやらなければいけないということでは、鄧小平さんも江沢民さんも肝に銘じたわけです。

あのとき、もし趙紫陽さんが李鵬さんと鄧小平さんを逮捕してしまったとします。あのときは天安門広場がワーッと沸いていました。趙紫陽さんはトップですよ。軍の中にも亀裂があった。結局、趙紫陽さんは人がよかったものだから、戒厳令が出る一九八九年五月十九日の前々日、彼は天安門広場へ行って涙ぐんで、自分がここへ来るのが遅過ぎたと。民主化にかけてゴルバチョフとも会ったりしたのですが、結局、彼は捕まってしまった。それで、今日に至るまで、彼はどこにいるのかわからないわけです。しかし、彼は正式には総書記ですから、一種の予防クーデターによって押さえられてしまいましたが、もし、あのときにボタンがかけ違っていれば、中国は東欧諸国やソ連に先駆けて、民主化していたと思います。あのときの勢いでは。

そうであるが故に、その危機感というのはすごいもので、絶対に再びそうしてはいけないということから、中国は徹底的な抑圧システムをとっているわけです。法輪功に対する処罰がそうですね。ちょうど昨年、その摘発の最中に私はたまたま公務で長春にも行っていまして、東北師範大学に日本語予備学校ができて二十周年で長春に行ってきたのですが、あの法輪功というのは九一年に李洪志が始めたもので、彼はいまアメリカにいて、中国は国際逮捕状を出しています。

法輪功はもともとは気功集団です。気功集団にはいろいろありますが、どちらかと言うと道教的な原理です。儒教と道教という中国の二つの大きな戒律のもとになっているその一つですから庶民にウケやすいし、儒教のように難しい教えを袴を着て説くわけではないので、フワ〜ッと入っていくのです。そして、気功というのは身体鍛練法ですから、それと共に一つの教義が与えられると、なんとなくリラックスするらしいのです。そうでなかったら、あそこまで広がらないと思います。あっという間に広がりましたよね。社会学的に言ってみれば、疑似社会集団ですが、決して悪いことをしたわけではないのです。自分たちの気功をやりながら、新しい解釈で集団的に身体を鍛練していただけですから。それなのに、徹底的な取締をやったわけです。

これは中国の指導者にとっても非常にショックだったと思いますが、江沢民さん自身が法輪功の存在を知らなかった。去年四月に、中南海に座り込まれるまでは。北京の天安門広場のある辺りから中南海一帯は、絶対座り込みができない態勢になっています。そこに、宗教をやる人たちの一種の強さなのか、ゲリラ的に座り込んでしまった。それを密かに

視察した江沢民さんはびっくりして、徹底的な弾圧を指示したのです。いまでもしょっちゅう捕まったりしています。

法輪功は、推定ですが、中国共産党員よりも多い信者がいます。あれほど「共産党、共産党」と言ってきて中国は共産党の天下なのですが、共産党員というのはいま中国で六千三百万人です。ところが、私が「やがて中国は崩れるだろう」と言う理由はそこにあるのですが、共産党の根本的な弱さ。それは、力でコントロールしているからなのです。みんながいま共産主義を信じているわけではない。赤い大陸は日ごとに白くなっています。それでも力で、統治のシステムとしては共産党が絶対ですから。あるいは情報のコントロール。Eメールのインターネットも、中国当局は許していない。そこにも問題があります。しかし、情報というのは、それでも入っていくと私は思っています。

それが怖いから一生懸命統治するのですが、いま中国共産党に入党する人たちは、農民や労働者ではありません。もともと共産党というのは労働者、農民の党なのですが、今はみんなエリートが入党するのです。特権にありつきたい人、出世したい人たちが共産党に入るのです。農村に行っても、もう誰も「人民日報」など読んでいませんよ。私は去年、重慶から北京に行く飛行機で後ろのほうに座っていたら、中国も新聞サービスがあるようになりました。見ていると、「人民日報」をとる人は誰もいません。私は、自分の勉強のためにもとるのですが。

にもかかわらず、法輪功があっという間にいまの中国社会を埋めてしまったということは、まさに改革・開放の二十年という間に、ものすごい貧富の格差が生まれました。それから、毛沢東も偉い、鄧小平も偉いと教えられますから、いったい自分たちはどこに信頼の根拠を置いていいのか。鄧小平さんと毛沢東さんは水と油で、鄧小平さんから言うと、毛沢東をひっくり返したわけですから、それを今度は江沢民まで繋げて三世代をつなごうとしても、これはもう原理的にも無理があります。

そういうことを含めて見ると、中国社会の中に大きな空洞ができているわけです。この空洞を、あっという間に法輪功が埋めてしまったと言っても過言ではない。ですから、共産党にとっては、中国社会の内部から、天安門の民主化を抑えることはできたけれど、法輪功はなかなか抑えにくかったというのが現実で、いまはそれも徹底的に抑えようとしています。こういう状況が、いったいどこまで続くだろうかという、この辺もよく考える必要があると思います。

どうも中国は、いま見ていますと、浦東開発もマスコミが騒いだほど成功していません。上海の黄浦江の旧上海バンドの辺りは、リノベーションしてきれいになっていますが、浦東の開発区は依然としてインフラもないし、街がないところに果たして金融センターができるのかどうか。しかし、一時期の勢いからすれば、いまごろ浦東は香港に次いで、あるいは、香港を凌ぐ国際金融センターになっていなければいけなかった。

それから、皆さんご承知のように、船橋洋一さんが先日の『週刊朝日』にも書いていましたが、シンガポールはリー・クアンユー元首相、ゴートクチョン首相以下、みんな中国に行って、蘇州の開発にすごく力を入れていました。蘇州にシンガポール経済特区をつくるのだというので、数年前まであんなに力を入れていたのに、結局、中国にやられてしまって、シンガポールは痛い目に遭っています。

というのは、蘇州に経済開発区をつくる。ところが、そのためには道路を整備したり敷地を整えたり、ものすごいインフラにお金をかけなければならない。お金をかけさせておいて、すぐ隣に今度は蘇州市が自前の開発区をつくって、シンガポールに投資するよりこちらのほうがよいと言って、みんなそちらに誘致しました。リー・クアンユーさんに対しては、李登輝さんと違って、私はあまり高く評価していません。というのは、彼の手法は開発独裁ですから。シンガポールはピカピカした公園国家のようになっていますが、あそこに言論の自由は全くありません。少しでも体制批判をすると、すぐに捕まってしまうような、そういう開発独裁の典型です。その点はマレーシアも同じです。

ですから、アジアの経済が本当に強いかという点ですが、まだ民主主義の国が本当に少なくて、そこに私は、アジアの一つの限界があると思います。中国も含めて、香港もそうなりつつありますが、本当に自由な言論の上で市民社会が成熟して、市場経済がきちんと機能しているというところは、日本や台湾以外アジアには本当に少ない。韓国がそうかといえば、それに近くなってきてはいますが、ついこのあいだまでは韓国にもいろいろ問題がありました。イ

ンドネシアも、フィリピンもしかりです。

こういうことになりますと、「アジア、アジア」と一時は盛んに持ち上げて、それは大変結構なことですが、やはり欧米に比べてまだ大きくハンディキャップがあるわけです。ヨーロッパ、アメリカというのは、やはり経済は非常に強い。一時はだめだと言われましたが、最近は非常に復権してきています。

私は九一年～九二年、カリフォルニア大学のサンディエゴ校の大学院で教鞭をとっていました。その頃は、アメリカはもうだめで、これからはマイケル・クライントンの描く「ライジング・サン（昇る朝日）」だということで、日本の時代だと言われていました。しかし、アメリカではその頃、私もびっくりしたのですが、ちょっとしたモーテルなどを探すのに、コンピュータですぐにどんな施設があるのか出てくるのです。日本にはまだそんなものはなくて、びっくりしました。特に、天安門事件の直後に、あるアメリカの学者の家に行きますと、「中嶋先生の論文がどのぐらいあるか」と、パッとコンピュータで出してくるのにはびっくりしました。それから十年ぐらいで、アメリカ社会というのはあんなに変わっていったということを考えますと、そこに大きな問題がまだアジアにはあると思っています。

私は、中国がそこまで軍事力を増強するというのは、一つは内政問題。国内治安、国内のコントロールがありますが、もう一つは、やはり中国は長期的に覇権国家、「二十一世紀は中国だ」という一種のストラテジーがあるからなのです。その一環だと思います。そして、それにはアメリカを打倒しないといけない、アメリカになんとか追いつかなければいけないという形で、非常に日米関係にも気にして、アメリカとのあいだに楔を置いて自分のほうに近付ける。また、最近の中国は北朝鮮とも、ロシアのプーチン政権とも非常に関係がいいのです。我々が気がつかないところで、タジキスタンのドゥシャンベで中央アジア首脳会議のようなものをやって、それから、一時期民主化したけど混乱して、旧共産党勢力が強くなったモンゴルなども呼んで、江沢民さんが取り仕切っている。

この辺を日本は十分見ていかないと、大変なことになると思います。そういう意味で、私は中国は脅威だと思います。この中国の脅威に備えるだけの体制をきちんとすることが必要です。それには、日本は自由民主主義の国である限り、アメリカとの関係をきちんとしていかなければいけないと思います。クリントン政権でさえも、台湾が中国の軍事的な脅威にさらされたときには断固とした措置をとりました。航空母艦を二隻も台湾海峡に派遣するのは大変なことです。そこにやはりアメリカの偉さがあると思います。いざ台湾海峡を武力で脅かそうとすると、断固とした措置をとる。それによって、中国もトーンダウンしていったわけです。毛沢東の正義は、敵が弱ければ攻め、敵が強ければ引きですから。

まさに、そういうことを考えますと、日本も中国には経済的にも大変な支援をしているわけですから、支援するほうがいつも相手のご機嫌を伺っているという、その卑屈さから解き放たれない限り、二十一世紀の日本というのはいろいろ問題を解決できない。アジアのリーダーたり得ないのではないかと思います。

沖縄でサミットをやっても、すぐそこに台湾があるのだから、「台湾海峡の安全のために、ここが武力によって脅かされることは絶対に困ります」ぐらいのことを言えば、世界の新聞も報じますよ。ところが、中国を気にして、中国の気に障るようなことは言うまいとするから、あれほど何百億円もかけた沖縄サミットをアメリカはじめ世界のメディアは報じませんでした。

この辺に一つ大きな問題がありますし、特に安全保障の面では、日本はやはりきちんとしたことをしておく必要があると思います。この点では、私はブッシュ政権に期待をしているわけです。しかし、かりにゴア政権であってさえも、クリントンさんの路線はやはり踏襲すると思います。李登輝さんがアメリカへ行くのを拒否するようなことは絶対しないと思います。そこにやはり、アメリカ社会の持つ良さというものがあるような気がします。

そういうことを考えますと、中国を攻めようとする国がないにもかかわらず軍事力を増強し続ける中国。日本から援助を貰って、その浮いた分であちこちに支援して、中国の国力を増大しようとする、影響力を増そうとする中国に対しては、きちんとした、言うべきことを言っていかなければいけないと思います。

どうも、ご清聴ありがとうございました。

太田事業委員長　どうもありがとうございました。どなたか、ご質問はございますでしょうか。

――先生のお話、大変興味深く聞かせていただきました。少し先生もお話されましたが、東北、旧満州の現状について、果たして中国が東北地方を含んで統一されているのかどうかということ。昔はかなり疑惑の目を持って見られたと思いますが、最近はほとんど報道されませんので、次の機会に、ぜひ先生からお話を伺いたいと思います。よろしくお願いいたします。

中嶋　ありがとうございます。

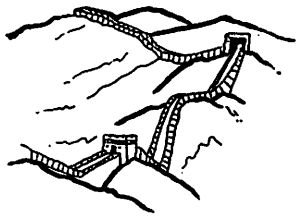
――中国は大変付き合いにくい国だと思いますが、中国の目から見て望ましい姿の日本、それから、アメリカにどうあってほしいと思っているのでしょうか。

中嶋　中国にとっては、いまのような日本が望ましいのでしょうね。国会議員が、朱鎔基さんの来日前に数十名も北京詣でをする。全部中国の接待によって頭を下げてくるというのは、まさに朝貢外交ですよね。一方では、ＯＤＡで援助を差し上げる。これは中国にとっては非常に望ましい姿であろうと思います。

一方、アメリカに対しては、中国はものすごく憧れを持っています。そういう目からすると、日本を越えてアメリカへの視線は非常に熱いと思います。ですから、そういう意味でも、日本はもう少し主体性を発揮すべきではないでしょうか。

このあいだの朱鎔基さんの来日も、李登輝さんの訪日と絡んで「その直後は困る」というような意見もいろいろありましたが、中国からすると、初めは日本だけに来るようなフリを見せて、サッと韓国に行ってしまいました。そのとき、私はたまたま会議でソウルにいたのですが、日本どころか韓国のほうが、いま朝鮮半島は注目の的になっているし、大はしゃぎでした。それだけ日本は前座を務めたに過ぎないような感じでしたね。中国というのは、実にそういうところは強かだと思います。

太田事業委員長　どうもありがとうございました。　―拍手―



〈講師紹介〉

中嶋嶺雄（なかじま みねお）**先生**

昭和十一年生れ。松本市出身。

三十五年東京外国語大学中国科卒業、四十年東京大学大学院社会学研究科国際関係論課程卒業、四十一年東京外国語大学奉職、五十一年教授に昇任。国際関係論、現代中国学、アジア地域研究専攻。社会学博士、平成七年同大学学長、現在に至る。「アジア・オープン・フォーラム」世話人代表、アジア太平洋大学交流機構（UMAP）事務総長、国立大学協会副会長などを兼務。

この間、外務省特別研究員（在香港）、オーストラリア国立大学、パリ政治学院、カリフォルニア大学サンデイゴ校大学院の客員教授などを歴任。

当倶楽部午餐会においては、五十九年三月「米中ソ関係と日本」六十二年三月「胡輝邦解任と日中関係」平成六年七月「三つの中国の時代」と題しご講演。

著書

「三つの中国」（日本経済新聞社）
「国際関係論」（中公新書）
「現代中国論」（青木書店）
「北京烈烈」（筑摩書房）
「中国・台湾・香港」（PHP新書）
ほか多数。

近著に台湾の李登輝前総統との共著「アジアの知略」（光文社カッパブックス）がある。

本講演集は当日の速記を先生にお目通し願って作成したものです。殊のほかご繁忙のなかをご丁寧にご校閲いただいた先生に厚くお礼申し上げます。

日本海運倶楽部
講演集　第三一六号
発行所　〒一〇一-〇〇九三
東京都千代田区平河町二丁目六番四号
（海運ビル）
社団法人　日本海運倶楽部
TEL（三二六四）一八二五
FAX（三二二一）〇二二八